アンチダンピングの共同申請と競争法

大阪大学教授 武田邦宣

1. アンチダンピング制度とカルテル、ノアペニントン法理

- ・アンチダンピング制度が、事業者によってカルテルの成立および維持に利用されることがある 1。 EU 委員会はカルテルの職権探知の端緒としてアンチダンピング申請がなされる場合を挙げている 2。
- ・米国でもアンチダンピング制度がカルテルの成立および維持に利用されることを危惧する意見があり、申請に FTC の関与を主張する学説もある 3。共同申請段階での情報交換によりカルテルが生じることを懸念するものもある 4。
- ・ノアペニントン法理は、その肥大化が指摘されており 5、反トラスト法一般に関する立場にかかわらず、学説上、必ずしも好意的な意見ばかりではない 6。FTC スタッフもノアペニントン法理の無規律な拡大を注意している 7。
- ・しかし米国法において、アンチダンピング措置の(共同)申請がノアペニントン法理の対象となることは確かであり、同法理に対する立場にかかわらず、共通理解となっている 8。

2. 許される情報交換と許されない情報交換

・司法省と FTC は、1995 年の国際事業活動ガイドラインにおいて、アンチダンピング措置の申請に必要な範囲を超える情報交換はノアペニントン法理により保護されることはないと述べたことがある。

Situation:

In the course of preparing an antidumping case, which requires the U.S. industry to demonstrate that it has been injured through the effects of the dumped imports, producers representing 75 percent of U.S. output exchange the information required for the adjudication. All the information is exchanged indirectly through third parties and in an aggregated form that makes the identity of any particular producer's information impossible to discern.

Discussion:

Information exchanged by competitors within the context of an antidumping proceeding implicates the Noerr- Pennington petitioning immunity. To the extent that these exchanges are reasonably necessary in order for them to prepare their joint petition, which is permitted under the trade laws, Noerr is available to protect against antitrust liability that would otherwise arise. On these facts the parties are likely to be immunized by Noerr if they have taken the necessary measures to ensure that the provision of sensitive information called for by the Commerce Department and the ITC cannot be used for anticompetitive purposes. In such a situation, the information exchange is incidental to genuine petitioning and is not subject to the antitrust laws. Conversely, were the parties directly to exchange extensive information relating to their costs, the prices each has charged for the product, pricing trends, and profitability, including information about specific transactions that went beyond the scope of those facts required for the adjudication, such conduct would go beyond the contemplated protection of Noerr immunity.

- ・第三者を通した、個別情報ではない統計的データの共有が安全と考えられている。他方、個別企業の費用や価格にかかる情報交換は、アンチダンピング措置の申請に必要不可欠とは言えないとして、少なくともノアペニントン法理の保護の対象外とする。
- ・司法省と FTC は、2000 年の水平協力行為ガイドラインにおいて、「競争上重要な情報 (competitively sensitive information)」の共有について、適切なセーフガードを設けることにより協調的行動の発生を抑止し得るとの考えを示している 10 。
- ・EU 委員会は、2011 年の水平協力行為ガイドラインにおいて、「戦略的情報(strategic information)」の共有について、価格と数量に関する情報が最も戦略的であり、費用と需要に関する情報がそれに続くと述べている。また、個別データか統計データか、過去のデータかどうか(data age)、データ共有の頻度などについて、その考え方を示している 11。

- ³ S.Cho, Anticompetitive Trade Remedies: How Antidumping Measures Obstruct Market Competition, 87 N.C.L.REV.357, 419-421 (2009) (輸出カルテルの適用除外法であるウェッブポメリン法を参考にする).
- ⁴ R.J.Pierce, Jr., Antidumping Law as a Means of Facilitating Cartelization, 67 ANTITRUST L.REV.725, 741 (2000).
- ⁵ そのような判例の傾向を示す最近の例として、U.S. Futures Exchange. L.L.C. v. Board of Trade of the City of Chicago, No. 18-3558 (7th Cir. 2020)。
- 6 ノアペニントン法理の肥大化を批判する T.Wu, Antitrust & Corruption: Overruling Noerr (2020), at 13 は、「R.BORK の ANTITRUST PARADOX でさえ、ノア法理が反競争行為に対してお墨付きを与え過ぎと言うのだ」と指摘している。なお、id. at 1 n.3 に、ノアペニントン法理に批判的な論稿が整理されている。
- ⁷ FTC Staff Report, Enforcement Perspectives on the Noerr-Pennington Doctrine (2006).
- 8 Pierce, Jr., supra note 4, at 741. Wu は、ノアペニントン法理を放棄して憲法上の価値を直接に評価する解釈方法を主張した上で、「商務省に鉄鋼関税の例外措置を求めるメーカーは憲法によって保護されるであろう、そして多くのロビー活動もそうであろう。」と述べている(Wu, supra note 5, at 17)。
- ⁹ DOJ & FTC, Antitrust Enforcement Guidelines for International Operations (1995), para.3.34.
- ¹⁰ FTC & DOJ, Antitrust Guidelines for Collaborations Among Competitors (2000), para.3.34 (e).
- ¹ European Commission, Guidelines on the Applicability of Article 101 of the Treaty on the Functioning of the European Union to Horizontal Co-operation Agreements (2011), para.86-94.

¹ 国際カルテルに関して、A.Gnutzmann-Mkrtchyan & M.Hoffstadt, Use and Abuse of Antidumping by Global Cartels (2019)は、①ニトリルゴムカルテル(1996 年~2002 年)においてインドによるアンチダンピング措置(1994 年)が協調的行動を誘引する機能を果たしたこと(at 7-8)、また、②ブラウン管カルテル(1997 年~2007 年)において EU によるアンチダンピング措置がカルテルを維持する機能(カルテル破りへの制裁)を果たしたことを(at 9-11)、それぞれ示している。

² Note by European Union, OECD Roundtable on Ex Officio Cartel Investigations and the Use of Screens to Detect Cartels, DAF/COMP/WD(2013)125, para.22-23. 域内カルテルを維持するために域外からの競争品を排除するシナリオを示しており、その具体例として、クロロプレンゴムのカルテル(O.J.C 251/3 (2008))について、アンチダンピング措置によって日本企業を排除しようとした例を指摘している。